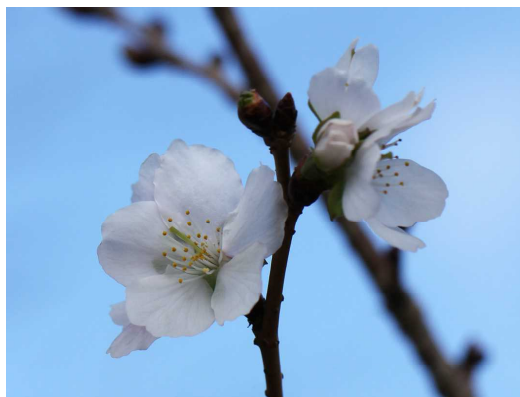


『今月の天候と農作業』

通巻第5561号
11月号
平成25年 11月 1日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 11月 2日(土)～ 11月 8日(金)

向こう一週間は、気圧の谷や湿た気流の影響で曇りや雨の日が多いですが、期間の中頃は高気圧に覆われて晴れる日があるでしょう。※詳しくは、週間天気予報をご覧ください。

<2週目の予報> 11月 9日(土)～ 11月 15日(金)

気圧の谷の影響は小さく、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

<3週目から4週目の予報> 11月 16日(土)～ 11月 29日(金)

冬型の気圧配置となる日が多く、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

普通作物

◆ 大豆

1 収穫

成熟期の目安は8～9割の株で、ほとんどの莢が熟色（淡褐色）になり、莢を振ると中で「カラカラ」と音がする時期となります。収穫に先立ち、大豆の青立ち株や大きな雑草と一緒に収穫すると茎汁や土で汚損粒の原因になったり、病害虫による被害粒を多く含んでいる場合がありますので、作業前に抜きましょう。

大豆コンバインで収穫する場合は、成熟期を過ぎて分枝がポキポキお折れる程度の時期で、作業時間は、茎水分の高い朝方や夕方は避け、晴天の日中に収穫しましょう。逆に、バインダーや草刈機の場合は、衝撃による脱粒ロスを防ぐため、水分の高い早朝か夕方に作業を行いましょう。地際に近い莢では泥の混入に注意が必要です。

2 乾燥

大豆は高水分の子実を急速に乾燥すると、しわや皮切れの原因となります。自然乾燥の場合は陰干しとし、また機械乾燥の場合は、高温で急激な乾燥をせず送風温度を30度以下に設定し、ときどき攪拌しながら徐々に乾燥しましょう。

◆ ソバ

1 収穫

バインダーや手刈りによる収穫は、子実の70～80%が黒変した時期の朝夕に行います。刈取り後は、10日ほど島立てし子実が粉状になるまで乾燥しましょう。

コンバインの場合は、子実の80～90%が黒変したときの晴天日に行いますが、茎葉に水分が多いと詰まりの原因になりますので注意します。

2 乾燥

乾燥は品質が低下しないよう直ちに行います。米麦用の静置式乾燥機などで、30度以下の低温で徐々に乾燥します。乾燥後は風選し、粒選別機などで夾雑物を取り除きます。

◆ 麦類

1 ほ場の準備

水田裏作では排水良好なほ場を選び、周囲の作溝等での湿害対策を行い、碎土は十分丁寧に行うことがポイントです。

麦は酸性土壌に弱いので、石灰質資材で酸度を調整し、堆肥は1トン程施用します。元肥は地区基準に基づきます。

2 種子消毒

黒穂病、斑葉病対策として薬剤による種子消毒を必ず行います。

3 播種

播種期は重要で、早すぎると凍霜害を受けやすくなり、遅れると穂数が不足しやすくなります。山間部では11月中旬頃、沿海部では11月下旬から12月始め頃に播種し、その後の安定した出芽苗立ちや生育のため、ほ場の周囲と、ほ場内に3m間隔に作溝を入れる等の湿害対策を行きましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

気温も下がり、本格的に暖房を開始する時期となります。11月末までは寒暖の差が大きいため、早い時期から内張ビニルを優先した保温を開始すると、一時的にハウス内の温度が上がり、軟弱徒長気味の生育となるとともに、湿度も高まるため、病害の発生につながります。加温機が稼働する範囲での内張ビニルの利用に心掛けましょう。また、きゅうり、トマト類の比較的低温で管理する作物では、最低気温が高い日もありますので、内張の開閉を習慣づけずに状況に応じた管理が必要となります。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となりますが、成り疲れにより草勢が低下しやすい時期となりますので、適期収穫を行うとともに不良果の摘果に努めます。かん水量の目安は10㎡当たり1.5～2ℓ/日とし、追肥量は草勢や着果状況に応じて施用しますが、目安としては、チッソ成分で10㎡当たり5～6kg/月 をかん水時に液肥として施用します。ハウス内の温度管理は、午前中26～28℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成きゅうりは摘心栽培、つる下ろし栽培ともに、植付けの早いもので主枝収穫から側枝収穫期となります。長期にわたり安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが栽培のポイントとなりますので、果実肥大を優先せず、内ビニルは解放し空中湿度を下げ、10℃を目安にできる限り低温での管理を行います。追肥は主枝収穫開始より、10㎡当たり窒素成分で0.2kg/日を目安に行い、かん水量は果実肥大にあわせておこないますが、10㎡当たり0.8～1.0ℓ/日を目安に少量多回数でのかん水管理をおこないます。日中の温度管理は、ハウス抑制きゅうりに準じて行います。

◆ ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。樹への着果負担も大きく、収穫遅れ等は、さらに草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長しますので、適期収穫に心掛けましょう。草勢維持として、果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行います。目安として、かん水量で10㎡当たり1.2～1.5トﾝ／日、追肥は10㎡当たり窒素成分で0.2kg／日とします。下旬より収穫の終了した第3分枝のフトコロ枝を順次除去し、通風、採光を図りましょう。

◆ トマト

促成大玉トマト、ミニトマトともに収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥をおこないます。追肥は、草勢を見て、大玉トマトで第3果房、ミニトマトで第5果房開花時より開始しますが、開花果房ごとに10㎡当たり窒素成分で1kgを目安に施用します。ハウス内の温度は、午前中25～28℃、午後22～25℃、夜間8～10℃とします。ミニトマトの夜温は大玉トマトより1～2℃高めに管理します。

◆ いちご

今年は育苗後期の気温低下により花芽分化が進み、9月20日を中心とした定植がおこなわれていますが、夜温管理として、開花肥大期は10～12℃、着色期8～10℃、収穫期7～8℃を目安に、ほ場の生育状況に合わせた温度管理を行ってください。中旬より電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで5分間／時間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行います。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ レタス

外葉が10枚前後になると結球を始めます。生育適温は15℃から20℃で、10℃以下では生育が遅れます。温度が高すぎると筍球（縦長の形状）等になりやすく、低すぎると生育遅延や硬く締まった小玉になります。結球後は5℃以下になると低温障害が発生しやすく、品質が低下しやすくなります。気象変動の大きい月なので下旬にはトンネル資材を設置し急な寒波にも対応できるように準備します。

◆ ブロッコリー

7～8月播きの収穫期となります。収穫の目安は頂花蕾の出蕾後10～15日となります。

収穫遅れにならないように注意しましょう。

◆ たまねぎ

普通栽培（4月以降に収穫）の定植時期となります。植付けの深さは3～4^{センチ}で、深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）の発生が多くなりますので注意が必要です。植付け後3～5日間は株元を中心にかん水を行い活着を促します。

◆ らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10^{センチ}当たり窒素成分で5kg程度を施用し、土寄せを行ってください。

◆ 食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期ですが、腐敗防止のため罹病いもや傷いも等を選別して貯蔵します。いもは9℃以下で腐敗し、18℃以上で萌芽します。貯蔵の適温は13℃、適湿度は90%ですので貯蔵庫の温湿度管理に留意します。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいため一度に大量に入庫すると庫内のCO₂濃度が上昇したり、湿度が高くなり結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防止しますが、空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気して庫内を除湿し新鮮な空気と入れ替えましょう。

◆ さといも

中生種の出荷期です。自家採種をする場合は優良なものを選抜し、子いもが離れないように株毎保存します。ほ場で保存する場合は低温障害をうけないよう、厚めに培土するなどの対策が必要です。

（河野 健次郎）

果樹

1 常緑果樹

中晩生かんきつ全般

肥料が吸収されるには、12℃以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽の充実の有効とされています。11月中旬までに施肥を行きましょう。

完熟きんかん

今年は結果時期が遅かったため、平年よりも果実肥大が遅れています。十分に肥大が確保されるまでは、秋季加温を行いましょ。昼温28℃程度を確保し、夜温は20℃程度を確保し、ある程度肥大が確保されたら、徐々に温度を落としていしましょ。

ビニールを被覆したハウスでは、ハダニが発生しやすくなります。また、収穫直前の防除は、果皮の裂皮を引き起こします。ハダニの発生に注意し、早めの防除を心がけましょ。

マンゴー

花芽分化に向けた管理としては、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温8℃程度を維持しましょ。十分に低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。五割程度の花芽発生を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に花芽を伸長させると、花粉の形成不良や子房の生育不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を引き起こすことがあります。開花が始まるまでできるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生育させましょ。

2 果樹園共通

台風等の強風から果樹を守る防風林や防風ネットの整備は、冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風林が高すぎたり、密閉度が高いと、発芽が遅れたり、アザミウマ類などの害虫被害が多くなるので、注意が必要です。

防風ネットは、網目のサイズと支柱や根石の大きさが重要なポイントとなります。傷んでいる部分はしっかりと補修しましょ。

防風だけでなく、防虫まで考えるのなら、園の上面も覆う、多目的防災網の設置も有効です。

(山口 和典)

花き

◆ 電照ギク

11月になると気温が低下し、結露しやすい状況が続きます。曇雨天で夜温が高いと加温機が作動せず、白さび病が発生しやすくなります。親株床から予防を徹底し、本ぼへの持ち込みを防ぐとともに、ハウス内では送風等で結露を防ぐなど、各対策を組

み合わせて予防を行いましょう。

また、夜温が急激に下がってきますので、開花の不揃いを防ぐためにもハウスの夜温管理をむらのないようにしっかりと行います。年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長防止や花のボリュームを出すために摘蕾作業は適期に実施して下さい。

◆ スイートピー

採花が開始されます。草勢や花のボリュームと気温等を考慮しながら出荷開始時期を決めましょう。天候の変化に十分注意し、曇雨天が予想される場合は液肥・かん水を控えるなど草勢に応じた肥培管理を行って下さい。11月上～中旬には施設のサイドを閉める気温になります。灰色かび病の初発の時期になりますので、必ず予防散布を行い、微生物殺菌剤のダクト散布を行いましょう。

◆ デルフィニウム

中山間地域の1番花の収穫が終了した場合は、ロゼットを打破させるためにハウスを開放し、低温に遭遇させて下さい。2番花を3月に出荷するために、スケジュールどおりの温度管理を実施しましょう。沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用し、茎の硬化を図り、収穫後は適切な前処理を行いましょう。

また、2番花のロゼットを回避するため、花穂伸長の終了時から電照を開始しましょう。

◆ トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天によりブラスチングが多発しますので、追肥は発蕾期には控えましょう。10月に定植したものはチップバーン等が発生しやすい時期に入りますので、一時かん水を控え、根域を広げるとともにカルシウム剤の葉面散布や硝酸カルシウム水溶液のかん注処理を行いましょう。

◆ ラナンキュラス

植え付け直後は乾燥させないことが重要ですが、過かん水は葉や球根の腐敗の原因になります。活着後は徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図ってください。最低気温が5℃を切るようになると保温・加温が必要になりますが、昼間は15℃ぐらいを目安にできるだけ換気を行い、品質の向上に努めましょう。ラナンキュラスの球根は小さく、それほど養分を貯蔵していないので、開花が始まったら草勢が落ちないように液肥の施用を継続的に行いましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

今月は、先月にも増して朝晩の気温産が大きな時期です。気温の下がりも大きく、徐々に空気も乾燥し本格的な寒さが来る時期です、そこで早めの防寒対策が必要になってきます。畜舎にすきま風が入らないように破損部分や出入り口等に、シートやコンパネ等を利用して防寒対策を行い、冷たい空気が直接家畜の体に当たらないよう注意しましょう。

この時期から子牛の風邪、下痢などの発生も多くなりますので畜舎の保温と換気に注意しましょう。特に生後3ヶ月齢以下の子牛はルーメンが発達していないため、寒さに弱く、下痢等で死亡する危険性も高くなります。保温効果を高めるために子牛房の敷料はこまめに交換し、乾燥した十分な量を随時補充しましょう。また昼間の気温の高い時間帯には牛舎内の換気を行い、新鮮な空気を取り入れるとともに、アンモニアなどの有害物質を除去していきましょう。本格的な寒い季節が来る前に、早めのワクチン接種により呼吸器疾患の発生を予防するとともに、換気、温度、湿度の適正管理を心掛け、家畜の観察徹底、各種疾病の早期治療や病畜の隔離を実施しましょう。

最後に、今年も渡り鳥の飛来する時期になり、鳥インフルエンザの発生に注意しなければなりません。野鳥侵入対策とともに、畜舎内外の消毒、石灰散布などの防疫管理を徹底し伝染病の侵入から農場を守りましょう。

◆ 飼料作物

ソルガムは平均気温が15℃を下回ると生育が止まり、その後の発育は見込めませんので、早めに冬作の作付けを行いましょう。またイタリアンなどの冬場の牧草は収穫時の硝酸態窒素が比較的高くなる傾向にあります。作付けする前は適正な施肥に努め、特に未熟堆肥のほ場への大量投入は避けましょう。

(小坂 昭三)

特用作物

◆ 茶

1 寒害・凍害防止対策

冬期の寒害・凍害の防止対策として防風垣や防風ネットを設置します。また、幼木園では、敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなりますので、敷き草はできるだけ

畝間中央に寄せるようにします。もし幹割れが発生した場合には、被害直後に株元に土寄せを行いましょ。

2 病虫害の防除

近年、一番茶前に増加傾向にあるカンザワハダニに対しては、越冬前の防除が重要です。飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への散布状況を確認しながら、専用ノズルの使用と適正な散布に心掛けてください。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続く時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が3～7割程度黄葉する11月下旬頃までが、樹木内の貯蔵養分が多く、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心掛けましょ。また、伐採後は、葉枯らし乾燥を1～2カ月程度実施ましょ。

2 発生操作

品種の特性にあった最低気温になってから、ほだ起こしや散水等の発生操作を行います。

なお、低温性の品種など、発生操作前にほだ木に雨がかからないようにした方が、安定した発生を期待できる場合がありますので、品種の特性について、種菌メーカーに事前に問い合わせると良いでしよ。

(小田 三保)

◆ たばこ

1 葉たばこの大きな減収要因である土壌病害（立枯病・疫病等）の菌密度の低下と、土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を最低三回以上行いましょ。

2 土壌検定を実施ましょ。結果、土壌改良が必要な場合は、石灰、ようりん等の散布を行いましょ。石灰散布の注意点として、土壌消毒との間隔が1ヶ月以上必要となります。

3 土壌消毒は、農薬使用基準に則って土壌水分の適正な時期に実施ましょ。実施する際には、薬害、公害のないよう十分注意して下さい。また、土壌消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理ましょ。

4 良質堆肥を10㎡当たり1, 200kg施用に向けて、材料を十分に確保ましょ。また、未熟堆肥投入を避けるために水分状態に注意しながら月に一回程度切り返しを行い、腐熟促進を図りましょ。

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

「食の宝庫」で食育・地産地消！

食は、私たちの生活にとって最も身近で、生命と健康を支えるかけがえのないものです。みやぎきの食と農を考える県民会議では、私たちが将来にわたり豊かで健康的な食生活を実現できるよう「食の宝庫みやぎき」ならではの食育・地産地消を推進しています。

◆ 食育推進リーダーと地産地消推進協力員



県民会議では、伝統的な料理や地域特産品などを使った料理教室や、お祭りなどの地域イベントなどをおして、正しい食生活や食の大切さを伝えたり、地域食材への理解を深めていただく取組をしています。

取組の中心は、食に関する幅広い知識を持つ82名の食育推進リーダーさんです。農業者をはじめ管理栄養士や調理師など、その顔ぶれは多彩です。皆さんも食育推進リーダーと一緒に食育・地産地消を実践してみたいはいかがでしょうか。

県民会議では、自主的に地産地消を実践するボランティア「地産地消推進協力員」の登録制度を設けており、随時、登録者を募集しています。登録者には、食育・地産地消に関するイベント情報や県民会議の活動状況など紹介しますので、地産地消に興味をお持ちの方は、ぜひ登録をお願いします。登録方法は、県民会議ホームページ（「みやぎき 食と農」で検索）をご覧ください。



◆ 食育・地産地消フェスタ2013

県民会議では、県民の皆さんに「いのちの恵みに感謝する心」「宮崎の食の豊かさ」を感じていただくイベントを、11月の「地産地消推進月間」に併せて実施します。食に関するトークショーをはじめ、県産品の試食・販売やふるまい、パネル展示、ゲームによる食育体験など「見る、聴く、匂う、味わう、触る」の五感で楽しむイベントです。オープニングセレモニーでは県産の餅米で作ったお餅の“せんぐまき”も行い

ますので、ぜひご家族やお友達とお越しください。

● **食育・地産地消フェスタ2013**

日時：平成25年11月10日（日）午前10時から午後4時まで

場所：JAアズムホール・野外イベント広場（宮崎市霧島）

※入場は無料です。

◆ 「食育・地産地消」に関するお問い合わせは、みやぎきの食と農を考える県民会議事務局（県営農支援課食の消費・安全推進室 消費・安全担当 電話：0985—26—7132）まで。

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	並	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入の防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	やや多	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
	タバココナジラミ類(ハイトイブ [®] B (シルバーリーフコナジラミ)、ハイトイブ [®] Q)	やや多	冬春きゅうり、ピーマン、トマトで発生が多くなっています。タバココナジラミ類には薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は追加の防除を行います。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ ※	— やや多	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部施設栽培等で確認され、徐々に拡大傾向にあることから注意が必要です。感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し埋却処分するか、完全に枯れるまで密封処理します。
冬春ピーマン	斑点病	並	両病害とも多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。
	うどんこ病	並	
	ミナミキイロアザミウマ	並	10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。また、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病	やや多	多湿条件下や肥料切れで発生しやすいので、ハウスの換気を良好にするとともに草勢維持に努めます。
	トマト黄化葉巻病(TYLCV) タバココナジラミ類※	前年と同程度 やや多	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミ類によって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	並	
	ハダニ類 アブラムシ類	並 やや多	収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
かんきつ類	ミカンハダニ	やや多	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや多	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。

1) ※は防除情報を発表しています。

2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki>です。